The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大谷大学所蔵高麗版大蔵経について

馬場久幸

一　はじめに

二〇〇六年七月から二〇〇七年九月までの四回にわたり大谷大学に所蔵されている高麗版大蔵経（以下「大谷大学本」と略称）を調査する機会に恵まれた。[1] 大谷大学本については、すでに諸氏によって詳しい報告がなされている。特に梶浦晋氏は、大谷大学本の現状、高野山金剛峰寺や建仁寺所蔵の高麗版大蔵経との関係、厳島神社からの伝来経路など詳細に報告しているが、その印刷年代や朝鮮半島からの伝来について明確な答えを得られていない。[2] そこで、本稿では大谷大学本と印刷年代が明確な増上寺本を比較し、その特徴である跋文について再考察すると共に、その印刷年代を明らかにする。

二　紙数と刊記の問題

高麗版大蔵経は、現在日本をはじめとして韓国や台湾、アメリカ、イギリスなどにも所蔵されているが、日本以外のものは近年に印刷されたものである。そこで印刷年代が明らかな増上寺本と大谷大学本について、大蔵経の張数と刊記を比較してこれらの違いを見てみたい。

増上寺本の特徴は、各経巻の後ろにあるはずの「〇〇歳高麗国勅雕造」という刊記がほとんど印刷されていないことである。これは、朝鮮時代に印刷されたことから、金山正好氏は「『高麗』という部分を故意に避けた結果としか考えられない」と述べている。[3] これに対して大谷大学本には刊記がほとんど印刷されている。また、刊記だけで一張をなしている場合、増上寺本にはその張自体が印刷されていない。例えば、『大方等無想経』五巻は、増上寺本では十九張であるが、大谷大学本では二十張である。『等集衆徳三昧経』二巻も前者は二三張であるが後者は二四張である。ただし、これらについては、最終張に版首（尾）題がないため、何張が正しいか判断が難しい。しかし、『仏般泥洹経』上巻は前者が三四張で後者が三五張、『無量寿如来観行供養儀軌』も十七張と

印度學佛教學研究第五十八巻第一号　平成二十一年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

経典名　巻数	増上寺本張数	大谷大学本張数	備考
大方等無想経　巻五	19張	20張	20張目に版首題なし
等集衆徳三昧経　巻二	23張	24張	24張目に版首題なし
仏般泥洹経　巻上	34張	35張	
無量寿如来観行供養儀軌	17張	18張	
釈摩訶衍論　巻七	21張	22張	
仏説白衣金幢二婆羅門縁起経　巻上	12張	13張	

十八張、『釈摩訶衍論』七巻も二一張と二二張、『仏説白衣金幢二婆羅門縁起經』上巻も十二張と十三張とそれぞれ異なる。高麗版大蔵経の場合、版首（尾）題に書かれている張数がその経典の張数になるのが原則で、これを考慮すると増上寺本は一張少ないことになる。（表参照）

さて、刊記だけで一張をなしている部分が、増上寺本では見られないことから、刊記部分や「高麗」の文字を避けるためにわざと印刷しなかったとすると、大谷大学本は朝鮮時代に印刷されたものではないと考えられる。

三　高麗版大蔵経に付された跋文

高麗版大蔵経に付された跋文は、大谷大学本以外にも見られる。ここでは、高麗版大蔵経に付され、或いは印刷された顛末がわかる跋文について見ることとする。

①太祖李成桂撰「印経跋文」

太祖は大蔵経を印刷して太祖二年（一三九三）に国泰民安と太平盛世を祈願して演福寺に大蔵経を奉安した。

②金温守撰「印大蔵経五十件跋」

世祖は先王先后と祖考（太祖）の霊が吉福を授かり、また福が法界の一切衆生と昆虫草木に至るまで授かることを願い、世祖三年（一四五七）に大蔵経五十蔵を印刷して全国の主要寺院に奉安した。増上寺本はこれに属する。

③黄獄山人学祖撰「印成大蔵経跋」

燕山君の妃である燕山君妃慎氏が、燕山君の萬寿無疆と元子宝体を発願して燕山君六年（一五〇〇）に大蔵経三蔵を印刷した。

④海冥壮雄撰「印経大蔵経跋」

李大王即位二年（一八六五）に南湖永奇と南冥長老の発願により、一万四千金を集めて大蔵経二蔵を印刷して五台山と雪岳山にそれぞれ奉納した。

⑤曺始永撰「印経跋文」と「印経事実」

歴代の王が国泰民安を願い大蔵経を印刷したという前例をもとに、高宗が光武三年（一八九九）に大蔵経四蔵を印刷して松廣寺、通度寺、海印寺、全国の主要寺院に分納し、国家の安寧を祈った。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

⑥寺内正毅撰「印大蔵経跋」

大正四年（一九一五）に、当時の朝鮮総督であった寺内正毅が天下の至宝である高麗版大蔵経三蔵を印刷した。これは、明治天皇の冥福を祈るために行なわれたのであり、宮内庁、泉涌寺、ソウル大学校奎章閣図書館に奉納された。

以上、6つの跋文は高麗版大蔵経が印刷された当時の顛末を伝えるものであり、これらの版木が海印寺にも残されている。(4) 現在、高麗版大蔵経の中で、大谷大学本と増上寺本に跋文が付されているのが確認されている。増上寺本については、印刷年代から日本への伝来経路がわかっている。また、大正四年の「印大蔵経跋」は、ソウル大学校所蔵の高麗版大蔵経では確認できなかったものの、当時泉涌寺に奉納する際に『大般涅槃経』四帙四十巻とこの跋文が奉呈されていることから、(5) 巻末に跋文が付けられていないことがわかる。

さて、跋文はあくまで大蔵経が印刷された当時の顛末を伝えるものであり、前代のものをそのまま付けることはない。例えば、増上寺本は、『一切経音義』巻第百の巻末に金温守撰「印大蔵経五十件跋」が付けられているが、(6) そこには太祖李成桂撰「印経跋文」が付けられていない。また、大正四年に印刷された高麗版大蔵経にも前代までの跋文が付けられていない。なぜなら、跋文は、大蔵経が印刷・製本されると同時に付けられるものであって、それ以外の目的で使用されたり、また後世に印刷された大蔵経に再度付けられたりする理由がないからである。つまり、大谷大学本の跋文は、その当時に付けられたものであると判断せざるを得ない。

四　大谷大学所蔵高麗版大蔵経の跋文

大谷大学所蔵の高麗版大蔵経の特徴は、李穡（一三二八～一三九八）の跋文が付いていることである。そこで、まず李穡の跋文を見ることとする。

門下評理廉仲昌父語予曰興邦事玄陵由進士至密直典貢士。極儒者榮。所以圖報之靡所不為也。如来一大蔵教萬法具擧三根齊被。無幽明無先後革凡成聖之大方便也。是以歸崇日多流布日廣。如吾者亦幸印出全部焉所以追玄陵冥福也。同吾心助以財者雖甚衆吾父領三司事曲城府院君吾母辰韓国大夫人權氏吾室之義父判門下漆原府院君尹公前判書朴公出錢尤最多幹茲事化楮為紙化紙為経捐其財盡其力者華厳大禅師尚聰陽山大禅師行齊宝林社主覚月禅洞社主達劍又與吾同志者也。將誌諸卷末以告後之人①。幸予無辭。穡曰吾先人文孝公事玄陵潛邸及卽位穡由及第至政堂。圖報之至亦化大蔵一部矣②。吾二人者心同事又同焉故不辭 蒼龍辛酉九月 日推忠保節同德贊化功臣三重大匡領藝文春秋館事韓山君李穡跋

この跋文によると、蒼龍辛酉、即ち辛禑七年（一三八一）に廉興邦（？～一三八八）を中心として、父の廉悌臣や母の権氏たちが亡くなった玄陵、即ち恭愍王（在位、一三五二～一三七四）の冥福を祈るために大蔵経を印刷したことがわか

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る。廉興邦は恭愍王に仕えた人物であり、王が亡くなった後、その冥福を祈ろうと大蔵経を印刷するわけであるが、その縁由と印刷経緯を後人に伝えるため、李穡に跋文を書くことを依頼したのである。ここで注目すべきことは、横線部の①と②である。まず、横線部①には「將誌諸卷末以告後之人」とあり、大蔵経印刷の経緯を後人に伝えるために跋文が記されて、諸巻末に付けられたことがわかる。この跋文を数えてみると、『大般若波羅蜜多経』巻十をはじめとする諸経典の巻末に、合計で四二五箇所に付けられていることが確認できた。大谷大学本は全部で五六〇五帖（冊）あり、その内高麗版大蔵経は四九九五帖ある。つまり、その約十分の一に跋文が付けられていることから、横線部①は裏付けられる。

次に、下線部②には、「穡曰吾先人文孝公事玄陵潛邸及卽位穡由及第至政堂。圖報之至亦化大蔵一部矣」とあり、李穡も高麗版大蔵経を印刷したことが記されている。この大蔵経については、それが印刷される三十年前の忠定王二年（一三五〇）に話は遡る。李穡の父である李穀（文孝）は、母を亡くし仏式で葬儀を挙げるが、尚聰師から追善供養として大蔵経を印刷してはどうかと薦められ、実践するも翌年の忠定王三年（一三五一）に他界してしまう。父親の突然死を悲しむも間もなく急遽元から帰国した李穡に、尚聰師は大蔵経を印成しようとしていた亡父との関係を伝えるが、李穡は父の意志を受け継ごうとはしなかった。それ以降の経緯について「神勒寺大蔵閣記」に次の通りある。

歳己未、聡公適自山中来、語予曰、今茲吾年七十又四矣。而幸不死、得與公相見、豈偶然哉。先大人之言、歴歴在耳、公能記憶否乎。予益自傷焉曰、上以資福於先王、下以継志於先考、不在斯歟、不在斯歟、予病新起、奉教撰懶翁塔銘未久也。因自計吾力則不足矣。可頼以辯此者、惟懶翁徒耳、即馳書告之、有号無及琇峰二浮屠、率其徒徙臾、始自庚申二月暮縁覺㠯於順興、覺岑於安東、覺洪於寧海、道恵於清州、覺連於忠州、覺雲於平壌、梵雄於鳳州、志寶於牙州、化楮為帋、釈幻造墨、至辛酉四月、印出經律論、九月粧褙、十月覺珠泥金題目、覺峰造黄複、十二月性空造函（中略）壬戌正月、於華厳霊通寺転閲、四月舟載至于驪興之神勒寺、懶翁示寂之地也。花山君権公僖圭盟題目、復與諸檀施財、同菴順公董役、遂於寺之南、起閣二層、覺修丹雘既畢、庋而蔵之、五月又転、九月又転、今癸亥正月又転、約歳三次為恒規（中略）嗚呼三十餘年之久、而先君之願始成、豈不自慶、又況推其極功、壽君福國於無窮也哉。[7]

大蔵経を印刷した理由は、父の李穀は先王に長く仕え、李穡も宰相の官府になったことから、その恩に報いて冥福を祈り、亡き父の意志を受け継ぐことであった。大蔵経の印刷は李穡だけではどうすることもできず、懶翁（一三二〇～一三七六）の弟子である無及と琇峯らの力を借りて禑王六年（一三八〇）に行なわれた。その後、霊通寺で転読会が開催され、驪州神勒寺に安置されたことから横線部②も裏付けられる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

これにより、李穡も大蔵経を印刷していたことがわかる。しかも、廉興邦が大蔵経を印刷した時期とほぼ同じ頃であった。彼も父が被った先王への恩恵に報い、また冥福を祈るために大蔵経を印刷していたこともあり、廉興邦と同じ志を持っていたことがわかる。そこで、李穡は廉興邦の依頼に応じて跋文を書いたのである。

五　おわりに

以上、大谷大学本の印刷年代について考察した。大谷大学本は増上寺本と比較して、ほとんどの巻末に「刊記」が印刷されており、それだけで一張をなしている部分も印刷されていることから、朝鮮時代に印刷された増上寺本と明らかな違いがある。高麗版大蔵経に付けられた跋文は、当時の印刷経緯を伝えるものであり、大蔵経が製本された後にそれを付けるのが原則として考えるなら、以前の跋文を付けるようなことはしない。李穡の跋文が大谷大学本の諸巻末四二五箇所に付けられていることが確認でき、また、李穡も同時期に父の意志を継いで先王の冥福を祈るために大蔵経一蔵を印刷していたことなど、跋文の内容と一致していることがわかった。つまり、大谷大学本は跋文通り高麗末期である辛禑七年（一三八一）に印刷されたものと判断できる。

1　調査は韓国国立文化財研究所によって進められ、筆者もそこに参加した。これに関する報告は、『海外典籍文化財調査目録―日本大谷大学所蔵高麗大蔵経―』（国立文化財研究所無形文化財研究室、二〇〇八年十二月）に詳しい。

2　常盤大定氏は跋文の内容を説明しているだけで、それに対する検証をしてない（「大蔵経雕印考」『哲学雑誌』三二二号、一九一四年）。小田幹治郎氏は跋文だけで判断せず、紙質と板面摩滅から増上寺本（一四五七年印刷）より後に印刷されたと判断している（「内地に渡れる高麗板大蔵経」（『朝鮮』七四号、一九二一年）。梶浦晋氏は、増上寺本と比較して版面の磨滅の状態や紙質などからそれと隔たらない時期に印刷されたと判断している（「本館所蔵高麗版大蔵経―伝来と現状―」『書香』大谷大学図書館報、一九九〇年）。

3　金山正好『増上寺三大蔵経目録解説』、増上寺史料編纂所編、一九八一年。

4　藤田亮策「海印寺雑板攷」『朝鮮学報』一三九号、一九九一年。

5　「大蔵経奉献顛末」『朝鮮彙報』大正五年四月一日。

6　『増上寺資料集別巻　増上寺三大蔵経目録』、増上寺史料編纂所編、一九八一年。

7　『神勒寺大蔵閣記』、『東文撰』巻七六。

〈キーワード〉　高麗時代、高麗版大蔵経、李穡、廉興邦、跋文

（佛教大学総合研究所研究員）

NII-Electronic Library Service